

# 他の地域でも桜島大根は育つの？

## メール、Web通じ子ども自身が成長

垂水市立大野小・中学校 図師弘秋教頭（前・鶴丸小学校）

### <プロジェクト以前>

鹿児島県東市来（ひがしいちき）町立鶴丸小学校に勤務以前は、ICT活用の経験がありませんでしたが、パソコン専科の加配教諭として「知らない」ではすまないで、コンピュータの使い方やLANの技術を独学で参考書などを手がかりに習得していきました。鶴丸小学校はこねっと・プランの参加校で、他校とテレビ会議などを行っていました。しかし、古いコンピュータがほとんどで、財団法人コンピュータ教育開発センター（CEC）などからの助成を得て、ICT環境を整備していきました。

### 実践の経過、教訓

#### 児童の発問がきっかけ

平成12年度から勤務した垂水市立大野小・中学校の子どもたちから「桜島大根は桜島以外の地域でも育つの？」という質問があり、その言葉にヒントを得たのが、「THE DAIKON ～全国一斉桜島大根プロジェクト」をはじめたきっかけです。

当初は、桜島大根を育て、観察し、インターネットを使って参加校と交流するという観察中心のプロジェクトでした。また、インターネット博覧会の富士通パビリオンで、にんじんを題材に同種の試みを行ったこともあります。

桜島大根は、成長すると葉っぱを広げた姿が大人が両手を広げたほどになり、収穫時には大人が一人で抜くのも大変なほど大きくなります。この大きいということが子どもたちには嬉しいようで、プロジェクトが継続する一因になっています。

参加校数も初年度は12校でしたが、年を追うごとに増加しています。15年度は、従来のプロジェクトをもう一歩進めて、「考える大根」。つまり、子どもたちにテーマを与えて考えさせ、例えば「農薬を使うべきか否か」でディベートをするなど、「深まりのある大根学習」を展開したいと考えています。

#### 命の大切さ学ぶ

桜島大根は、育つまでに半年という長い期間が必要ですが、子どもたちは作物を育てる経験を通



### 全国一斉桜島大根プロジェクト

「THE DAIKON」全国一斉桜島大根プロジェクトは、気候・土壌など条件を異にする各地の参加校が、同じ桜島大根の種を蒔き、育てるとともに、その成長を記録し、他校と交流するプロジェクト。発足当初から現在まで図師先生が幹事役をつとめている。

例年9月に、事務局から送られてくる種を蒔き、翌年の1月から2月に収穫する。育つプロセスの観察記録をホームページに掲載。参加校同士で、メールやチャット、掲示板、テレビ会議などで情報交換をしていく。「葉っぱつきの重さが一番重いものを優勝とする」というコンテストも2月に実施され、2002 DAIKONコンテストでは、13.8キログラムの大きさの大根を収穫した鹿児島県菱刈町立菱刈小学校が優勝した。

参加校数は12年度12校、13年度国内26校、海外1校計27校、14年度国内33校、海外2校計35校と増加している。海外からはポルトガル、スペインの小学校が参加している。

参加費は、参加1学級あたり1000円。参加校は、種まきの時期は気候に合わせて自由に決めてよいが、2月初旬までに収穫を行う。また、大根の育つ様子をホームページで公開し、1週間に1回以上更新することが課せられ、更新が途切れると参加校リストから除外されるという厳しさもある。

さて、桜島大根はインドネシアでも育ってしまった、とか。学校間交流を通し、情報活用能力を高まるとともに、「自然を愛する豊かな心の育成」「地域理解や国際理解を深める」ことも目標としている。

<http://www.daikon.org/>

じて、命の大切さを学ぶことができます。また、子どもたちが意欲を持ち、張り切ってプロジェクトを進めていくことで、子どもたち自身が成長していきます。他校の子どもたちと交流学習を行う中で、「考える場」を設定できることも良い効果につながっていると思います。

### 小規模校で迅速に

本校のような小規模校は、フットワーク良くさまざまなプロジェクトを迅速に始められるという利点があります。

また、赴任当時にはICT環境がなかったので、さまざまな機関の支援を得て自らの手で整備しました。苦労はありますが、大規模校よりも小規模校の方が迅速に整備でき、有利ではないでしょうか。現在本校では、LinuxをサーバOSとした校内LANを手作りで構築しています。



「でっかい桜島大根を収穫したよ！」

### 課題

これまでの取り組みの中で、さまざまな企画が出てきました。また、参加校が増え、学校間で温度差が出てきたり、交流するにもお互いの顔が見えにくくなる、といった問題が生じています。

## 10年間を振り返って

### 「教育が変わる実感」がICT活用の原動力

私がICTを活用した授業を続けているのは、自発的・内発的なものではなく、担当者に任命され「しょうがないから」というのがはじまりでしたが、その後は「走り出したら止まらない」状況になりました。それは、「インターネットが教育を変える」、「インターネットはインパクトがある」という確信が持てたこと。また、インターネットは子どもたちが今後生きていく社会に必須の手段であり、その活用方法の教育をサポートしなければならないという思いがあるからです。さらに、ホームページの向こう側にいて、見守ってくれている人の存在も励みです。

#### <成功の秘訣>

第1に、本プロジェクトのような長丁場のプロジェクトの場合は、参加者を飽きさせない工夫が必要です。イラストコンテストなどのミニコンテストを月1回実施・表彰したり、バッジを配るなどしています。

第2に、企画の内容を明確にし、他者にも良く分かるようにしておくことです。THE DAIKON プロジェクトは単純で、一本筋が通っているので成功しているのだと思います。

第3に、子どもたちが伸びるだけでなく、先生もプロジェクトに参加することで「得した気分」になり、プロジェクトを通じて「先生も伸びる」ことを実感できる内容になっていると良いと思います。

第4に、校内体制です。「学校は組織である」、「組織の長である校長の許可は必要である」という前提条件を踏まえて活動すべきです。そのためには、校長や教頭先生と日頃から、良い意味で何でも話せる関係になっておくことが重要です。

第5に、コアメンバーの存在とメーリングリストの運営の2点が重要です。

#### コアメンバーの存在

THE DAIKON プロジェクトでは良い仲間がいて、こねっと・プランの時代からおつきあいのある人たちがコアメンバーになって頑張ってくれました。この先生たちは他校に転任してからもその学校の中心になってプロジェクトを推進してくれます。プロジェクト運営に当たっては、コアメンバーを大切にし、サポートすることが幹事校の役割です。こうしたコアメンバーは、「コンピュータを使える」、「例え遠隔地であっても自腹を切って参加してくれる」といった共通の特徴があるようです。

#### メーリングリスト

単なる連絡用のメーリングリストではなく、何かを成就することを目的としたメーリングリストを運営できたことも成功の要因だと思います。メンバーは、このメーリングリストに参加することで、「同じ目標に向かっている」という連帯感が醸成されるからです。